

新書紹介

過疎地帯の文化と狂気

奥能登の社会精神病理

萩野恒一著

新泉社 B6版 三三四頁 一、五〇〇円

乱読の愉しみは、日ごろ自分

が関心をもつテーマについて、思わぬ分野から刺激的な書物に出会い、著者の新鮮で示唆に富む意見と課題への独自の接近方法を見出すことにある。右にあげた本は、精神医学の立場から書かれたものであるが、既存医療のわく組みと専門領域を越えて、現代の文化や社会と医療とのからみ合いについて語られている。その意味で、門外漢の私にも、十分に興味と関心を誘うものであった。

ところで、昭和四十一年にはじめて「過疎」という言葉が、『経済審議会の地域部会の中間報告』のなかに書かれてから、

すでに九十年を経過した。ま

た、今井幸彦氏は昭和四十三年に、その著書『日本の過疎地帯』（岩波新書）の冒頭でこのことについて、「過疎という聞きなれないことば」と書いているが、今日ではすっかり聞き慣れた言葉になってしまった。先の『中間報告』によれば、過疎は、「産業構造の変動にともなう人口の減少や、年齢構成の老齢化、地域の生産機能の低下などで、従来の生活パターンの維持が困難になった状態」と定義されるが、現実の過疎化という社会現象は、こうした地域の量的・経済的な変貌ばかりではなく、もっと深刻な問題、つまり

現代文明に特徴的な伝統文化の崩壊や、人びとの心の荒廃といった問題をも顕在化させた。この間、農山漁村の衰退や「出稼ぎ」の増大を、経済の高度成長の結果として説明し、その責任を追求した書物は多く出されている。しかし、著者みずから一人の生活者として過疎地域の「内」側に飛びこみ、徐々にむしばまれつつある人の心の問題を中心にみつめた研究報告は少なかった。

この、伝統的な価値体系その

ものの喪失の問題は、本書全体を貫くほど重要な主題なのである。大都市病理としての過密現象に参加しているのは、ほかならぬ過疎地域の若い人たちが、ないし青壮年に属する人たちであり、さらに重要なことは、ここ十年來の大都市にみられる人口の増大や、年齢構成の若年化、都市文明のにせの繁栄などなどは、過疎地域とまったく背中あわせの社会病理現象を含蓄している、ということである。

つぎに、ここに書かれた奥能登の分裂病者の一例一例をみていくと、そこに一定の共通点が

見出せる。過疎地域から、それぞれ独自の文化と生活史を背負って大都市に赴き、そこでかりそめの自由と解放を得るのであるが、しかしその都市の文化との同一化に成功しなかったとき、彼らは決まってといほど赴いた先で孤立状況に陥り、心理的疎外感を体験している。つまり、共同体の確立している地方の小都市から、群衆のなかの孤独の生活を強要される大都市に転居する場合、この心理的疎外状況はそのまま、分裂病性妄想が発生する直接の契機ともなりうるのである。都市は、「帰るべき故郷を失って、あるいは見捨てた流れ者たち」のるつぼともなっているわけである。そこで発病した急性精神病患者たちの発病機制は、一般に文化ショックという社会精神病理現象として説明されるが、彼らが受けた文化ショックの現代性については、ますます機械的かつ画一的に進行しつつあるかみえる現代文明についての逆説的な証言者のようにも思えてくるのである。一言にしていえば、自己が依拠すべき、あるいは依拠し

たい価値規準そのものが見失われている現代人の危機が露呈されているかのようだ。その意味では、真の故郷の回復とは、「人と人との結び付きの回復」ではなからうか、と思えてくる。古い文献をひもとくと、いつの時代にも、またどの文化圏においても、狂人は存在していたらしい。日本の能や芝居にも、セルバンテスの戯曲にも、狂人をテーマにした作品がみられる。しかも、狂気は、意外にもその時代時代の文化や社会と密接な関係をもち、かなり正確に文化状況そのものを映し出す鏡ともいえるのではないか。こうした研究は、精神医学の領域では、まだ始まったばかりの若い学問領域であるが、社会的、文化的次元というまったく新しい観点から狂気を見直し、とりわけ現代文明の犠牲者ともいえる分裂病患者たちの心の病を治療していく方法を教えてくれるように思われるのである。

〈総務局行政部文書課 岡村駿〉